

M-GTA 研究会 News Letter No.58

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇共同研究会の報告	...	1
概要報告	...	2
「実践する人間」と「研究する人間」	...	4
理論とフィールドとの対話を求めて	...	5
M-GTAによる分析の実際：データ提供者として参加した感想		6
M-GTAによる分析の実際：スーパーバイザーを担当して	...	7
◇近況報告	...	8
◇編集後記	...	9

◇共同研究会の報告

【日時】11月12日（土）（13：00～17：00）

【場所】東北大学（医学部1号館 1階 第1講義室）

共同研究会

「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の可能性
—現場と理論のつながりを問う—

概要報告

山崎浩司（信州大学）

去る2011年11月12日（土）、東北大学医学部1号館第1講義室にて、共同研究会「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の可能性——現場と理論のつながりを問う」が開催されました。この会は、M-GTA研究会と日本質的心理学会研究交流委員会の共催、そして東北大学「質的分析」研究会の協賛ということで、「共同」研究会という形になりました。62名の方がご参加くださり、そのうち非会員（上記3つの会のいずれの会員でもない方）が33名で、東北地域の方たちがその多くを占め、企画者としては東北で開催した意義があったと感じています。

そもそもこの共同研究会を開こうと思ったのは、M-GTA研究会と日本質的心理学会が共に強固な基盤をもたない東北地方において、質的研究を実践してきている方々や強い関心を持っておられる方々にお集まりいただき、M-GTAについて、質的研究について、ともに議論する場をもちたいと欲したからでした。

そこで、現地で地道に質的研究を展開してきた東北大学「質的分析」研究会の主宰者である徳川直人先生や、他のメンバーの方々にご協力いただくことになりました。今回の研究会で目指したのは、①M-GTA／オリジナル版GTAの可能性について現場と理論のつながりに注目して検討することと、②データ提供者とスーパーバイザーによる公開スーパービジョンをとおして、参加者の皆さんにM-GTAを活用した分析の実際を実感的に理解していただくことです。

①は2つの講演と演者 - フロア間の質疑応答によって目的達成が図られました。最初の講演では、ヤマザキ学園大学の小倉啓子先生が「「実践する人間」と「研究する人間」と題してM-GTAを活用したご自身のご研究などを踏まえて論を展開され、次の講演では東北大学の徳川先生が「理論とフィールドの対話を求めて」と銘打って、やはりご自身の農村調査におけるご経験や、ご専門の社会学的な相互行為論などをベースにお話してくださいました。それぞれのより詳しい内容については、以下のお二人の報告をお読みください。

②の「公開スーパービジョン」では、早稲田大学の菊地真実さんが、ご自身の修士論文『在宅緩和ケアに関わる薬局薬剤師の現状と抱える問題点に関する研究』のデータや分析ワークシートを提示してくださいました。スーパーバイザーを務めた長野県看護大学の阿部正子先生および山崎とのやりとりを通して、研究関心の芽生えから、先行研究レビュー、テーマ設定、方法論の決定、データ収集、データ分析、結果（グラウンデッド・セオリー）の提示、そして結果の現場への還元に至るまで、菊地さんは限られた時間ながらかなり網羅的に研究展開を示してくださいました。多くの参加者にとって、M-GTA研究の実際を具体的にイメージするうえで大変参考になったのではないかと思います。菊地さんと阿部先生

による報告も以下で読むことができます。

こうした共同研究会の良さは、慣れ親しんだ仲間・環境・領域の中では気づかなかつたり忘れてしまっていたりすることを、（再）発見する機会を提供してくれることだというのを、あらためて実感した今回の研究会でした。ご協力およびご参加くださった皆さんに心より御礼申し上げるとともに、再びこうした場で一緒にできることを願うばかりです。

「実践する人間」と「研究する人間」

小倉啓子（ヤマザキ学園大学）

「研究する人間」であり、「実践する人間」であること—心理実践現場出身の立場から—というテーマでお話をさせていただきました。個人的な臨床経験からですが、実践者は自分の実践を何らかの形にして眺める、検討する、つまり実践と研究を同時並行して行うことが重要だと考えていましたので、このテーマとしました。

実践者が現場の状況やニーズに応じつつ、専門的アイデンティを維持しながら実践を柔軟に展開することはなかなか難しいことです。多くの理論や技術を学習していても、理論と現場との乖離、理想と現実の落差があります。特に看護・福祉など直接的対人サービス領域では、個別的ニーズへの応答と制度・理論の枠を守ることの間で、実践が行き詰ることがあると思います。専門家による理論が役立つのかという疑問も湧くでしょう。

こうした問題を越える一つの方法として、自らの実践に形を与え、問題改善のためのモデル作りをすることがあります。研究法からみると、実践者による研究は、現場の現実を反映したデータをもとにそこで生きる人々の意味世界を捉え、問題改善に有用な知見を得ようとすることから、M-GTAを含めた質的研究法が目指すところとよく適合すると思います。そして「現場で働く人」が「研究する人間」になるに従って、より有能な「実践する人間」になると思われます。自分の理論・作業モデルを得ると、他の理論や技術の意義や位置づけが分かり、有効に用いることが出来るようになるでしょう。このように、実践者が研究すること、「研究する人間」になることは、社会にとって有意義なことだと思います。

しかし、研究＝研究法＝分析手順ということではなく、質的研究の歴史的・理論的背景、質的研究の意義、GTAやM-GTAなど各研究法が準拠する理論、自分の問題意識や研究対象との関係など自己を対象化することが重要だと思います。その点、M-GTAは研究の全過程が自己対象化、自己省察、思考の言語化、外在化の連続であり、具体的にその方法を示しています。こうした経験は実践者、研究者としての訓練にもなります。

徳川先生のご講演では、方法論とご研究の往復が緻密に系統的に重ねられておられることを目の当たりにして、多くのことを教えていただきました。実践的志向に偏ることなく、常に質的研究、M-GTAの原点に戻り、自分の位置を確かめて研究していくことの重要性を再確認いたしました。

参加者の皆さまには感謝申し上げます。質的研究やM-GTAをめぐる研究について関心を持っていただけましたなら有り難く思います。山崎先生はじめ主催者スタッフの皆さまに厚く御礼を申し上げます。

理論とフィールドとの対話を求めて

徳川直人（東北大学）

相互行為論の祖のひとり G・H・ミードの古典を研究しながら農村でフィールドワークをやっております。農村でのフィールドワークは、基本的に「モノグラフ」の伝統のなかでおこなっておりますが、相互行為論や質的探究の観点から「意味世界」「社会的世界」としての営農志向や食・農文化を把握する方向をめざしています。そのなかで GTA に学びながら集計・分析作業をおこなったことがありますので、その経験からお話いたしました。

話題は、デスクワークを通した「感受化」、チームワーク、ルートイメージとしての言語論的転回（レトリカルアプローチ）、理論的討議とカテゴリーの飽和、課題の切り分けと論の構成、といったものでした。これらを通じて、「理論との対話」が求められる諸契機を探ったつもりです。要するに「集計」や「コーディング」も機械的な作業ではなく「理論的討議」の負荷がかかったおこないではないか、という趣旨でした。

そんな趣旨はすこし浮いてしまうかもしれない、もっと技術的な錬磨を求められるのではないか、むしろそこを勉強させていただこう、といったふうに想像していたのですが、参加してみると、GTA（M-GTA）とは手順的な技法（狭義の「方法」）にとどまらず、デスクワークや理論的討議も含んだ広い意味での「方法論」であることが、とてもよくわかりました。とりわけ、小倉先生の「リフレクション」のお話は、こんなにも共通項や交差点が多いものなのかと、驚くばかりでした。後半の公開スーパービジョンも大変参考になりました。狭義の手順・技法を吟味するうちに、広義の探究課題や問題意識までもが問われ、明確になってゆくのです。これはまさに、「問い」を育て、研究する人の目や手を方法として磨き上げるプロセスなのだ、と実感することができました。

お話をいただいた頃はまだ研究室も回復していないころだったかと思いますが、このように充実した時間を持つことができたのは、個人的にも幸せなことでした。企画していただいた方々、お集まりいただいた方々、本当にありがとうございました。自分の社会学に何ができるのかをいっそう自覚的に考えてゆくためのヒントにしたいと存じます。

M-GTAによる分析の実際～データ提供者として参加した感想～

菊地真実（早稲田大学）

このたび、公開スーパービジョン「分析の実際」のデータ提供者として発表させていただきました。今回の共同研究会は、「現場と理論のつながりを問う」というサブテーマがつけられていることから、M-GTAの可能性について、現場と理論のつながりに照準して検討することが目的とされていました。

そのため、発表の準備を進めるにあたり、なぜ私はこの研究をしようと思ったのか、何を明らかにしたいと思ったのか、と改めて研究の原点に立ち戻り考えてみました。そして、薬局薬剤師として業務を行うからこそ湧き上がった問題意識があり、だからこそ研究をしたいという思いに至ったことを思い起こしました。分析は、現場で自分の抱く問題に向き合うための作業でもあったように思います。

そして、「分析の実際」ということから、できる限り私自身の思考のログを振り返りながら発表させていただいたのですが、オープン化についても、収束化についても、また結果図の作成についても、何か平面的なスライドだけの発表では収まりきれないような、そんなもどかしさがありました。しかし、発表の途中途中で、スーパーバイザーの阿部先生、そして山崎先生から投げかけられる問いに対して、考えそして言葉に発して答えることにより、少しずつもどかしさの穴を埋めていけたようにも思います。的を射ない答えもしてしまいましたが、それは自分の思考が不十分であったのだと自分自身が一番よくわかりました。分析作業というのは、ひとりだけでは十分な思考にまで発展できないことがあるのですが、「問い」が投げかけられることにより、より深い思考に発展するということをたびたび実感しておりました。そのような分析の実際が、少しでも参加された方々に伝わればと思います。

また、今回の合同研究会に参加させていただくことで、震災後の仙台を訪れることができましたことは感慨深いものでした。そして、東北の地で研究をされている先生方、また学生さんとお知り合いになることができたこともとてもうれしく思っております。今後も、研究を通して交流させていただければと思っております。

このたびは発表の機会を与えていただき、ありがとうございました。

M-GTAによる分析の実際～スーパーバイザーを担当して～

阿部正子（長野県看護大学）

このたび菊地真実さんの修士論文作成過程を題材に、「データ提供者とスーパーバイザー（SV）による公開スーパービジョンを通して、M-GTAを活用した分析の実際を実感的に理解する」ことを目的としたセッションを担当させて頂きました。SV側から参加者を見ると、データ提供者の発表を聞きながらうなずいたり、データ提供者とSVとのやり取りではメモを熱心にとったりと、きっとご自身の分析過程を思い起こしながら聞いていらしかったのだらうと思われる姿が見受けられました。

今回のスーパービジョンはいつものM-GTA研究会で行うものとは少し異なり、すでに完成している研究を題材に、先行文献レビューの仕方や研究テーマの決定までの期間（プロセス）はどのようなタイミングで行われたのか、また実際の分析では特にオープンコーディング（概念生成）から収束化（概念間関係の吟味による全概念の関係づけ）への移行が、どのようなタイミングや形で起こっていったのか、研究結果について同僚あるいは他職種からどのような評価を得たか等についてやり取りがなされました。私もSV席にしながら自分の論文作成時を思い起こし、改めて客観的に研究実践プロセスをなぞる経験をさせて頂きました。

一方で、「分析を実感的に理解する」ためのスーパービジョンが不足した感も否めません。配布資料にあった分析ワークシートを用いて分析の実際を公開スーパービジョンで参加者にお示しできていれば、M-GTA特有の分析ワーク用途を活用することで、バリエーション（データ部分）→定義、定義→概念、概念→バリエーションという3方向で解釈の妥当性がチェックできるという“ツールの理解”を、もっと深めて頂けたのではないかと思います（今回物足りなかったと感じられた方は、M-GTA研究会の定例会にぜひご参加ください）。

最後になりますが、今回会場に集まった同じ志を持つ大勢の仲間との出会いは、今後の研究活動においても有益なネットワークを提供してくれるはずです。私自身、そうした機会に参加できたことを感謝しつつ、皆様の今後ますますのご活躍を祈念しております。

◇近況報告：私の研究

宮城島 恭子（浜松医科大学医学部看護学科）

私は小児看護学領域における教育に10年ほど携わっています。研究歴は浅いものの、臨床経験から小児がん看護に関心を持ち研究に取り組んできました。臨床経験は病棟看護が主ですが、小児がん患者を取り巻く状況の変化（治癒率向上、成人期へ移行する経験者の増加、本人への告知や復学・社会生活に伴う周囲への告知の広まり、晩期合併症等を見越した長期フォローアップ体制の始まり等）とともに、外来での看護・チームでのフォローアップに関心をもって参りました。そこで外来通院中の思春期～成人の小児がん経験者やその保護者に、入院・闘病体験を踏まえた日常生活の調整や健康管理とそれらに対する思い、その中での親や医療者、友人等の周囲の人とのコミュニケーション等について研究してきました。直接患者さんやご家族のお話を伺う面接調査では、患者さんやご家族の理解が深まることに手ごたえはあるものの、その前後では課題も多く感じ、看護実践に生かせるところまではいっていません。

M-GTA 研究会には2009年から会員として参加させていただいていますが、これまでM-GTAを用いた研究には共同研究者として少し携わった位でした。今年度からは自身の研究「小児がん経験者が病気を抱える自己に向き合う過程とその影響要因」でM-GTAを用いた研究に初挑戦しています。面接調査にてデータは数事例集まってきたものの、日頃仕事（院生への研究指導を含む）や育児に追われ、なかなかまとまった時間がとれず分析はあまり進んでいません。これまで質的な研究は内容分析を用いたものしか行っていないのですが、M-GTAではプロセスを明らかにできるところに魅力を感じており、対象理解および支援方法の抽出が深まるのではと期待しています。今後もっと分析を進め、研究会で皆様のご意見をいただく機会や、公表にて多くの皆様と成果共有できる機会をもてるようにしたいと思っていますので、よろしくお願い致します。

外来看護はどこも人員をあまり割けず、治療終了後の小児がん患者は日常生活も自立しているため看護師の関わりは少ないのが現状ですが、復学や長期的視点でのフォローアップ支援、ひいては入院中の看護にも役立てばと思っています。

.....

三沢徳枝（創造学園大学）

近況報告の機会を頂いたので、今どんなことに取り組んでいるか、これから取り組もうとしているかを述べさせていただきます。

私が関心を持つテーマのキーワードは、“貧困な環境”、“居場所”、“主体性に繋がる支援”です。社会的に排除された人が社会に包摂されていくための支援ということに興味を持ったのはある NPO 法人の活動を知ってからです。貧困が社会問題となっていますが、私の「なぜ？」という問いは貧困な環境の子どもへの支援に向いています。現下の自立支援プログラムでは、対象者の主体性に繋がる支援という面で十分でないという指摘もありますが、被保護世帯の子どもを対象にした学習支援や引きこもり、不登校支援など、当事者である子どもの主体性に繋がる支援という点から捉えなおす必要があるのではないかと考えます。例えば子どもが学習支援プログラムに参加する意思があっても、保護者がそれを認めなければ子どもは参加できないので、保護者への働きかけが必要になりますが、それに応じない保護者の問題があります。子どもの権利の主体という面から、子どもを中心とするアプローチを実践の場面に則して検討していきたいと考えています。

学習支援事業に関わる支援員が「（学習教室には不登校や虐待、いじめなどにあった子どもいるが）傷つけ合うだけでなく、助け合い、励まし合う関係もあると気づいて欲しい」と言われたことが印象に残っています。わかりあえる関係を築く居場所をつくることも自立支援であると考えます。

時間と空間と人との関わりの接点に居場所があり、物理的あるいは精神的な居場所が考えられます。先の震災でこれらのつながりを突然失った被災者の方々が、生活を立て直す過程で居場所をつくり出しており、これが時間の経過によりどう変化していくのか、その時何を必要としたのか、これからの研究テーマとして来年度から時間をかけて取り組む予定です。

.....

◇編集後記

・今年もあと 1 カ月足らずとなりました。師走をいかがお過ごしでしょうか。実践で、そして研究で、それぞれの手ごたえをお感じになられた年だったと拝察します。お目通し頂きましたように、皆さまのお陰で、当研究会も、各地で質的研究を探究しておられる方々との知と学びのネットワークを拡張することができました。山崎先生、お骨折り有難うございました。これだけ Web が発達しても、やはり対面での相互作用でしか得られないことはたくさんあると思います。そして、ニューズレターが、参加できなかった方が今回のコミュニティを追体験することにお役にたてれば幸いです。編集チーム一同、来年もお役にたてるよう頑張ります。今年も有難うございました。来年も宜しく願い申し上げます。

<m(_ _)m> (竹下)